

古代・中世の鋳鉄鋳物

五十川 伸矢

はじめに

1 古代・中世の鋳鉄鋳物資料

2 鋳鉄鋳物の生産工房と生産の変遷

おわりに

論文要旨

鋳鉄鋳物は、こわれると地金として再利用されるため、資料数は少ないが、古代・中世の鍋釜について消費遺跡出土品・生産遺跡出土鋳型・社寺所蔵伝世品の資料を集成した。これらは、羽釜・鍋A・鍋B・鍋C・鍋I・鉄鉢などに大別でき、9世紀～16世紀の間の各器種の形態変化を検討した。また、古代には羽釜と鍋Iが存在し、中世を通じて羽釜・鍋A・鍋Cが生産・消費されたが、鍋Bは14世紀に出現し、次第に鍋の主体を占めるにいたるという、器種構成上の変化がある。また、地域によって異なる器種が用いられた。まず、畿内を中心とする地方では、羽釜・鍋A・鍋Bが併用されたが、その他の西日本の各地では、鍋A・鍋Bが主要な器種であった。一方、東日本では中世を通じて鍋Cが主要な煮沸形態であり、西日本では青銅で作る仏具も、ここでは鉄仏や鉄鉢のように鋳鉄で製作されることもあった。また、近畿地方の湯立て神事に使われた伝世品の湯釜を、装飾・形態・銘文などによって型式分類すると、河内・大和・山城などの各國の鋳造工人の製品として峻別できた。その流通圏は中世の後半では、一国単位程度の範囲である。

こうした鋳鉄鋳物を生産したのは、中世には「鋳物師」と呼ばれる工人であった。鋳造遺跡の調査成果から、銅鉄兼業の生産形態をとるもののが多かったことが想定できる。また、生産工房は、古代には製鉄工房に寄生する形態をとるが、中世には鋳物砂の産地周辺に立地する場合が多い。中世後半には都市の周縁に立地するものも現われた。生産に必要な固定資本の大きさから考えて、商業的歴史はありえても、移動的操業は少なかったものと推定できる。